

転識得智の異説に関する慧沼の見解

長谷川 岳史

一 はじめに

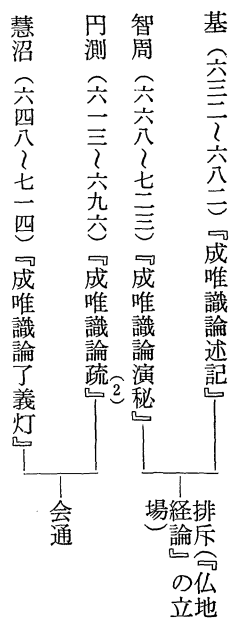
有漏の第八・第七・第六・前五識を転じて、順次にそれぞ
 れの識に應じて、無漏の大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成
 所作智を得るといふ転識得智説は、周知の通りインド・チベ
 ットにおいて支持され、また、中国・日本においても『成唯
 識論』以降正義とされている。しかし、漢訳の唯識論書の中
 には、四智の中、妙觀察智は前五識を転じて得られ、成所作
 智は第六識を転じて得るとする異説を説くものがある。

筆者は以前に、この異説を説く文献に着目し、異説に対す
 る中国唯識諸家の見解について検討した⁽¹⁾。

まず、異説を説く文献には、異説を排斥している親光等造
 玄奘訳『仏地経論』と、中国において異説を説くものとして
 扱われた無著造波羅頗蜜多羅訳『大乘莊嚴經論』と無性造玄
 奘訳『攝大乘論釈』という二つの系統がある。

次に、異説に対する中国唯識諸家の見解であるが、これに

は以下のような二つの立場がある。



しかし、中国においては、この異なる二つの立場の正否に
 関する議論は行われなかったため、日本において問題とさ
 れ、特に、唯識三祖の内、ただ一人異なった見解を提示する
 慧沼の立場について議論された。本研究では、この日本にお
 ける議論の発端となった慧沼の見解に関する問題点や、日本
 における評価について検討する。

二 転識得智の異説に関する慧沼の見解

『成唯識論了義灯』卷七末

〔問〕 釈転識得智中。大莊嚴論第六識得成事智。転五識得妙觀察智。此論相違。如何会釈。

〔答〕 本有二解。一云莊嚴不依次説。非言転六得成事智。故不相違。二疏外別解云。莊嚴論中擧第六識能作神通等諸成業云得事智。五識因位能不觀察。果位方能云得觀察。故亦不違。無性兩釈。各隨一義不違二論。然仏地論破転五識得觀察智。云説法斷疑非五識能者。是破別師。非破莊嚴。

（大正四三・八〇九下）

この慧沼の二つの見解に關する問題点に關しては、以前にも触れたが、第一義の『大乘莊嚴經論』は「不依次説。非言転六得成事智。」であるという見解は成り立たない。それは、『大乘莊嚴經論』では、明確に「八・七・前五・六」というのは識を転ずる次第であると述べられており、また、慧沼は『金光明最勝王經疏』において、『大乘莊嚴經論』を典拠とした転識得智説、つまり異説を引用・支持しているからである。第二義の妙觀察智と成所作智との兼能を述べる見解については、円測の『成唯識論疏』の見解と一致する。

三 『唯識論同学鈔』における慧沼説に關する諸見解

慧沼の見解が日本においてどのように評価されていたのかを良算（一一九四～一二二七）編『唯識論同学鈔』をもと

にみていくと、日本では慧沼に対して批判・擁護の二つの立場があつたことが分る。

批判説

〔問〕 莊嚴論中説転識得智義。転五六識得觀察成事二智云云。兩者淄洲大師何釈此文給乎。灯作二釈。一云莊嚴不依次説。二云説兼能也取心。

〔答〕 共有疑。披大莊嚴論説見明転識得智之文。八七五六識次第転得故云云。既以八七五六為次第。何云不依次説乎。付後釈。諸教説智品作用多説正用。至莊嚴論説何忽論兼能乎。若以五六之文為兼能者。転八七得円鏡平等。寧非正用哉。

（大正六六・五七五中）

この批判説は、慧沼の見解全般に關して批判したものであり、特に第二義に關しては、大円鏡智と平等性智については正用を説き、妙觀察智と成所作智に關して兼能を説くというのは矛盾するのではないかという指摘がなされている。

擁護説①

会之諸師会釈非一。其中依宗家解釈有二釈。一者莊嚴不依次説也。二云至仏果已第六具神通作業用。五識備觀察諸法徳互有其能。莊嚴依此義。唯識談正功能也。就初釈不依次之説者。西天元有二師。故存五六之次之人誦莊嚴云五六也。非慈氏本意為言。第二釈意円鏡平等説正用。妙觀成事顯兼能。影略互顯也。為言。

（大正六六・五七五下）

擁護説②

〔尋〕 先付初釈料簡。灯云不依次説。未見誦者誤。何輒闕現文謬乎。次莊嚴現文誰人所誦乎。次二釈中以何為正乎。

〔答〕 初釈同本疏。又演秘叙此釈。知稟承之実義也。然不依次説者誦者誤者。先徳所推也。

（大正六六・五七五下）

擁護説③

灯師写仏地論之詞云不依次説意顯莊嚴彼不依次之人所誦也。松室云。非者音可説云云。意云。訓灯文云不依次説。非言転六得成事云云。親光不依次者。意破莊嚴論文云五六也云云。

（大正六六・五七六上）

これら擁護説に共通しているのは、異説は誦者の誤りによって生じたという見解である。そして、慧沼の見解の内容に關しては、①は、妙觀察智と成所作智について兼能を説いたのは影略互顯を意図したものであるとし、②と③の仲算（九三五・九七六）の見解は、一部の原文の意味を操作することによって、慧沼の見解が『仏地經論』や基・智周と異ならないということを主張するものである。しかし、いずれの論証も、何等裏付となる典拠をあげていない。

四 結び

慧沼の見解には、異説を排斥する『仏地經論』や基『成唯

転識得智の異説に關する慧沼の見解（長谷川）

識論述記』に対する配慮が何等なされておらず、第一義に關しては、明らかに見当違いなことを主張している。また、『金光明最勝王經疏』にみられる『大乘莊嚴經論』の異説の引用は、慧沼が正説・異説を会通する立場にあったというよりも、むしろ、異説の方を支持していたことを意味しているようにもとれる。

この慧沼の見解に關しては、中国においてはその正否に關して問題とされた形跡はない。そのため、日本においてこの問題が取り上げられ、先にみた『唯識論同学鈔』の中でも、批判・擁護の諸説が述べられている。しかし、擁護説のほとんどは、問題点をかえた説得力に欠けるものであり、却って混乱の度を深めているように思える。

- 1 拙稿「転識得智に關する唯識諸家の見解—インド・中国篇—」(『龍谷大学仏教学研究室年報』七号、一九九四年)
拙稿「転識得智に關する異説」(『印度学仏教学研究』四三卷二号、一九九五年)
拙稿「転識得智に關する唯識諸家の見解—日本篇—」(『龍谷大学仏教学研究室年報』八号、一九九五年)
2 『成唯識論本文抄』卷四四(大正六五・七七三上)

〈キーワード〉 転識得智(異説)、慧沼、『唯識論同学鈔』

(龍谷大学大学院)